

北海学園大学 経済学部

# 地域研修報告書2006

平成18年度 私立大学教育研究高度化推進特別補助採択事業







北海学園大学 経済学部 部長

小田 清

## 2006年度『地域研修報告書』の発行にあたって

地域経済学科に開設されている「地域研修Ⅰ・Ⅱ」の目的は、「地域づくりの諸活動」を直接見聞・体験することによって、現実の生きた地域経済・社会を学習することにおかれています。すなわち、講義やゼミナール等で学んだ理論や知識をもとにしながら、地方自治体や民間企業、各種団体やNPOによる様々な「地域づくり」「マチおこし」「国際交流」などの取り組みに触れることによって、その地域が抱えている悩みや諸問題、あるいは良き事例を学ぶというものです。また、泊まり込みなどで地域住民との交流を深めながら、地域づくりに寄せる住民の熱い思いを学び取ることも目標としています。

これまでの経済学のイメージは「理論=座学」が中心でしたが、近年では多様な学問分野を取り込んで幅を広げています。この「地域研修」もそのような広がりの一つです。その成果の発表は履修者全員参加の下、ゼミ単位での「地域研修報告会」として行われています。その概要を『報告書』としてまとめたものが本冊子です。ご覧頂ければ幸いです。

なお、この地域研修は、その実績が認められ、本年度から文科省の「私立大学教育研究高度化推進特別補助事業」に採択され、予算措置を頂きました。次年度以降はさらに充実した地域研修となることが期待されています。ご協力頂いた地方自治体や各種団体の皆様に深く感謝申し上げます。

### 〈目次〉

1	浅妻 裕 ゼミ ■研修地:福岡市、長崎市	2	9	竹田正直 ゼミ ■研修地:石狩市	10
	「持続可能な都市と公共交通」			「合併後の新しい石狩市の社会経済と環境問題」	
2	池田 均 ゼミ ■研修地:函館市	3	10	西村宣彦 ゼミ ■研修地:苫小牧市、石狩市	11
	「地域の社会・経済」			「サケ定置網漁の体験及びサケ加工場の見学」	
3	太田原高昭 ゼミ ■研修地:芦別市、旭川市	4	11	古林英一 ゼミ ■研修地:苫小牧市	12
	「北海道発の元気な企業を訪ねて」			「さけ定置漁業の実習体験」	
4	奥田 仁 ゼミ ■研修地:余市町	5	12	古林英一 ゼミ ■研修地:浦河町、新ひだか町、新冠町、他	13
	「地域産業の実態調査」			「競走馬生産・流通施設の見学」	
5	川村雅則 ゼミ ■研修地:夕張市	6	13	水野邦彦 ゼミ ■研修地:韓国 ソウル市・水原市	14
	「夕張地域住民との交流と、学生の成長」			「韓国社会を知る実地研修」	
6	北倉公彦 ゼミ ■研修地:長沼町	7	14	水野谷武志 ゼミ ■研修地:西興部村、枝幸町	15
	「グリーンツーリズム・part3」			「市町村合併」	
7	小田 清 ゼミ ■研修地:倶知安町	8	15	山田誠治 ゼミ ■研修地:函館市	16
	「オーストラリア人観光客急増によるニセコ・ペンション街への影響調査」			「地域メディアとは何か」	
8	高原一隆 ゼミ ■研修地:ニセコ町	9	16	山田誠治 ゼミ ■研修地:金沢市	17
	「地域経済の内発的発展と地域内経済循環」			「コンパクトシティの魅力を探る」	





# 地域研修報告会

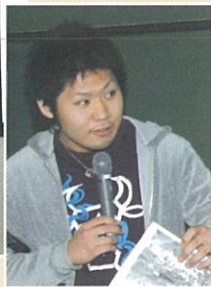
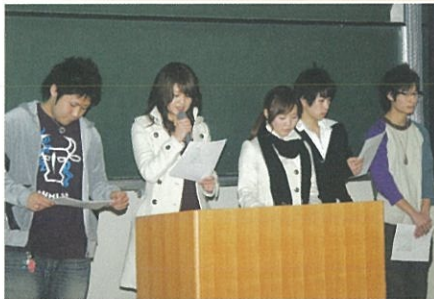
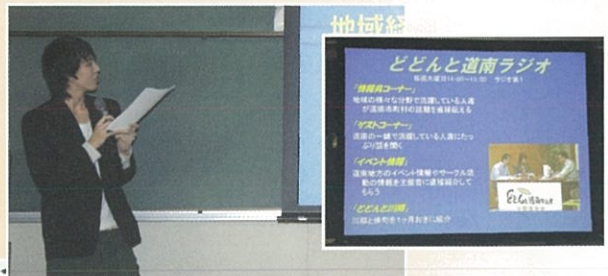
(2006年11月25日・12月2日)  
地域研修担当・責任者 小田 清

「地域研修」は地域経済学科の特色ある科目の一つとして、2004年度から始まり、今年度で3年目になります。初年度の研修は、石狩市や旭川市、夕張市、栗山町、倶知安町、西興部村など、札幌周辺自治体を中心としての地域調査が大半でした。2年目以降は、その反省と経験を踏まえ、より内容を深めた「研修テーマ」の設定が多くなり、その結果、本州地域や海外地域にまで研修範囲が広がり、かつ本格的な地域実態調査を踏まえての長期間の地域研修も行われるようになりました。

その成果は「研修テーマ」に則してゼミ単位で蓄積され、先輩から後輩へと継承されつつあります。将来的には一つのまとまった「研究報告書」として公表することを目標としております。また、この報告会を契機にして、経済学部ゼミナール討論大会へと発展することも秘かに期待しているところです。

本年度の「地域研修報告会」は11月25日と12月2日（いずれも2講目）に実施されました。各ゼミの報告は、かなり内容の濃いパワーポイントやOHPを作成してのもので、報告担当者もこれら機器を上手に操っての決められた時間内での報告で、昨年度までの経験が十分に継承されていることを感じました。ただし、当初予定した数を遥かに超えるゼミ報告があり、濃密な研修内容が報告時間不足によって、駆け足になったことが悔やまれます。

次年度からは、経済学科にも開講されることもあって、さらに報告数の増加が予想されます。その対策として、類似した報告をまとめ、分科会方式で報告時間を増やし、さらに質問時間も設定して、学会並みにより内容の濃い報告会を実施し、地域研修の成果を高めていきたいと考えています。各ゼミの次年度での益々の研鑽を期待しております。





1

## 浅妻 裕 ゼミ

Yutaka Asazuma Seminar



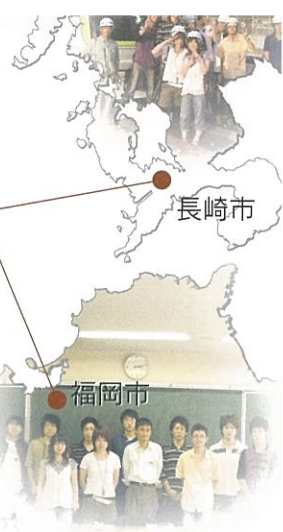
## 持続可能な都市と公共交通

■研修地：福岡県福岡市、長崎県長崎市

■参加学生10名 ■研修期間：06年9月14日～17日

■経済学科助教授：浅妻 裕

公共交通は「都市の装置」といわれ、公共交通を明確に都市政策に位置づけることで、都市の再生や活性化を図っていくことが可能である。福岡や長崎は、黒字経営の地下鉄、日本最大のバス会社、100円均一運賃の路面電車など、公共交通の経営で着目されている地域である。これは公共交通の体系が都市の経済活動と密接にリンクしているからであり、また、公共交通が都市政策に位置づけられているためと考えられる。このようなことを聞き取り調査で具体的に学習しつつ、実際に利用し経験したことは、北海道の公共交通と都市づくりについて考えるための良い機会となった。



## 学生報告



地域経済学科2年 藤崎 健夫  
(苫小牧西高校出身)

## 公共交通とまちづくり

「公共交通がまちづくりにどんな影響を及ぼしているのだろうか。」というテーマについて、今回の地域研修に向けての事前学習、そして研修地である福岡、長崎でのヒアリングによって学びました。

私たちがヒアリングした福岡市営地下鉄、西日本鉄道、長崎市電はそれぞれ経営的に注目を集めている公共交通機関です。いずれにも共通するのはコストの削減です。運転手にOBの起用や、他都市の中古の路面電車の活用などを行うことでコストを低くすることができ乗客増につなげました。その結果、交通の回遊性が高まり市内中心部の商店街や郊外にある観光地の活性化に貢献しました。さらに福岡市では自家用車を使う人が減ったため、渋滞の緩和、交通事故や違法駐車が減少しました。そして私が一番良い効果を生んでいると思ったのが排ガスなどの環境問題です。1人が1キロ移動するのに必要な排ガスの量では個別交通である自家用車と公共交通であるバス、地下鉄などでは100倍前後も違います。これは今日の環境問題を考える日本、そして世界においても大きな意味をもつでしょう。

このような公共交通によって環境問題の改善にも貢献していると思われる福岡、長崎の取り組みに対して、私たち北海学園大学のある札幌ではそれに学ぶべき点が多くあるように感じました。私たちがこれからも生活していくであろう札幌がより良い都市になっていくためには、交通に起因する様々な問題にも対応し改善していく必要があるのではないかと思います。



経済学科2年 大浅 綾香  
(岩見沢東高校出身)



## 地域研修を終えて

私たちは、九州の福岡市と長崎市に行きました。福岡では福岡市交通局を訪れ、黒字経営を続ける福岡の地下鉄事業について、また西日本鉄道(株)にて、福岡都心100円バスの事業実態についてヒアリングを行いました。さらに長崎では長崎電気軌道(株)にてヒアリングを行い、長崎電気軌道は市民にとっても観光客にとっても重要な交通手段になっていることを学びました。

福岡市交通局では工場見学を行い、普段知ることのできない地下鉄の構造を知り、また札幌の地下鉄事業と比較することでより一層理解を深めることができました。100円バスと長崎電気軌道は実際に自分たちが乗ることで、話を聞くだけでは知りえない現場の雰囲気を感じ取ることができました。また、限られた時間の中で、屋台巡りをしたり、ハウステンボスで遊んだり観光気分も満喫することができました。

地域研修は、現地の人々の生の声を聞けるだけでなく、皆と行動を共にすることで大学では見られない多様な一面を発見できるという魅力もあります。私たちは仲間と部屋で毎晩のように盛り上がりました。交流を深めることで、ゼミメンバーは大学生活における大切な仲間となりました。先生も学生に負けなくらいアクティブで、かなりハードな日程でしたが、このゼミに入って地域研修を体験でき、本当によかったと思う瞬間が多々あります。普段行くことのない場所で貴重な体験をし、様々なことを学べる地域研修は人生における大きな糧になると思います。



2

## 池田 均 ゼミ

Hitoshi Ikeda Seminar



## 地域の社会・経済

- 研修地:函館市(函館どっく)(大船遺跡)
- 参加学生35名 ■研修期間:06年7月6日~7日
- 地域経済学科教授:池田 均

大船遺跡で見た「原北海道人」が私たちに残したものは何であったのか。脈々と伝わる「技術」によって生きのびた「函館ドック」。見て、聞いて、楽しんで、考えさせられた地域研修でした。

函館市

## 学生報告



地域経済学科2年 豊嶋 健司  
(室蘭清水丘高校出身)



## 函館どっく

池田ゼミでは、「函館どっく」を研修の対象として選びました。

「函館どっく」は明治29年11月、「函館船渠株式会社」として創業以来、船舶の建造・修理、橋梁・産業機械の各分門を中心に、東京以北で屈指の重機械メーカーとして活躍しています。今回の研修では、その「函館どっく」の歴史について調査してきました。

1970年代、高度成長がストップした際、一度経営が困難な状況に陥ります。経営が復興するまで、リストラや工場縮小といった手段をとらざるを得なくなりました。ではどうやってその経営不振から立ち直ったのか?というのが最大の注目点です。

まず現地調査に赴き、会社の方々には話を伺い、造船の現場を見学させていただきました。工場内で一番目を引いたのは、船体に使う鉄板の加工を、機械ではなく職人さんたちが手作業で行っていたことです。船体を形成する微妙な曲線も、職人さんがバーナーと水で熱し、冷やしながらかい基準で作り上げていきます。自分の目、感触で精密に作業していました。そしてこの確かな高い技術に経営再興の理由がありました。中国が急激な成長を遂げ、「世界の工場」といわれ、より多くの工業製品を輸出するために、より良い船、つまり積載量が多く、浅い港にも入ることのできる船が必要となったのです。これにより、高いレベルの船の需要が高まり、「函館どっく」の再興につながった、ということです。現在では、新規開発32,000tのばら積貨物船、これは一隻18億円相当です。この形の船が、何年先までも中国やヨーロッパからの予約でいっぱい状況です。

調査の際、進水式を見させていただきましたが、手作業で作られられた巨大な船が海に浮かぶ姿に感動し、感慨深いものがありました。



地域経済学科3年 渡邊 航太郎  
(札幌西陵高校出身)



## 北海道の縄文時代とは

今回の地域研修で池田ゼミは歴史と海鮮の街である函館市を訪れました。2年前に5つの市町村が合併したということもあり函館市自体が広域にわたるため、見学したのは函館市の造船所「函館どっく」と元南茅部町にある「大船遺跡」の2か所でした。

研修先の一つ、大船遺跡では縄文時代に思いを馳せるとともに、その暮らしぶりをうかがい知ることができました。

道南から青森にかけて遺跡が多々出土しているこの地域一帯において、南茅部では大船遺跡をはじめとした遺跡が大規模な集落として発掘されましたが、その歴史は古く約9000年前に縄文人が生活を始めていたことを示すものでありました。ここではその時期の土器や竪穴式住居などの標準的なものに加え、ヒスイやアスファルトなどといった驚きの文化を表すものまでが発掘されています。その文化とはこの道南地区と津軽海峡を挟んで本州東北部に交易があったということです。そのこともあり両者は密接に交流を重ね共通の文化圏を築き上げていました。また、大船遺跡ではクジラやオットセイなど海獣の骨が出土するなど食文化においては北海道独自のものがありました。

これらは多くの出土品からの推察に過ぎませんが、そこには確かに太古の時代に過ごした遠い昔の人々の暮らしがあったのだということを感じることができました。

今回の研修では、このように私達の知らない遠い昔の先祖の歴史を学ぶこととなりましたが、それは驚きと発見の連続であり、たいへん有意義なものとなりました。



3

## 太田原 高昭ゼミ

Takaaki Ootahara Seminar



### 北海道発の元気な企業を訪ねて

- 研修地：芦別市、旭川市
- 参加学生12名
- 研修期間：06年9月4日～6日
- 地域経済学科教授：太田原 高昭

ゼミナールでは『北海道の企業』をテキストにして、北海道から全国に展開している元気な企業のケース・スタディを行っているが、研修旅行ではこのテーマと結び付けて、芦別市の北日本精機と旭川市の株式会社カワムラを見学することにした。参加した学生は高い理念を掲げて全国や世界に雄飛している道内企業の活躍に感動を覚え、地域経済を学ぶ視点を得たのではないかと。熱心に対応していただいた両社の皆様に深く感謝します。

北日本精機株式会社

旭川市

芦別市

## 学生報告



地域経済学科2年 牧野 克二  
(滝川高校出身)

### 地域研修を終えて

一番印象に残ったのは、芦別市にある「北日本精機」での研修です。行く途中で食べた芦別市にしかない「ガタンラーメン」は、昔炭鉱の町であった芦別市の炭鉱労働者が好んで食べていたそうで、わずかながらも地域の歴史に触れることができ嬉しく思いました。

現地に着き案内された会社の中は、まるで高級ホテルを思わせる内装と、自社の製品であるベアリングを組み合わせた装飾で、とても工場とは思えないつくりで圧倒されました。また驚かされたのが、案内された会議室で待っていたのが小林英一社長だったことです。「これからを担う若者には自ら直接熱意を伝えたい」という言葉に、社長の現代社会に対する想いがひしひしと伝わってきました。

その後、社長自ら工場内を案内していただき、世界にひとつしかないというベアリングを生産する精密機械を見学しました。ただ精密な部品を大量に生産するだけでなく様々な企業のオーダーに応じたベアリングを生産するという話を聞き、技術の高さに対応の柔軟性に感動した有意義な研修でした。「北海道という地域を愛する」ということが、企業活動にもいかに重要なかということ学びました。私たちこれからを担う世代が、北海道の特性を生かした活動をする必要性を感じました。



北日本精機のベアリング工場を見学



北日本精機にて小林社長のお話を聞く



株式会社カワムラのプレカット工場を見学

株式会社カワムラにて

地域経済学科3年 大内 貴恭  
(江別高校出身)



### 工場見学レポート

今回北日本精機の見学をして、自分達の地元である北海道に起業した会社が海外から注目を受けるほどに高水準の製品を生産していることにとても驚きました。そしてこれからも成長を続けていってほしいと思いました。

二日目は激しい雨になったので予定を繰り上げて株式会社カワムラを見学することになりました。カワムラは現社長の川村純一氏の祖父である豊二氏が1918年に設立した「川村建具製作所」が始まりで、現在は旭川市を本拠とする住宅建築会社です。工場に到着して最初にパワーポイントを使って「ノース工法」などの説明がありました。四季を通じて温度差65度もある旭川に研究所を設け、一年を通じていかに快適に暮らせる空間を作るか研究を続けてきた結果生み出された「ノース工法」は、北海道はもちろん南は九州まで高い評価を得ているそうです。

次に木材加工を行っている現場を見学しました。工場には江戸時代などに活躍した名工の名を付けた機械がたくさん並んでいて、熟練の職人のように寸分の誤差も出さず、次々休みなしに木材を加工し続けていました。この設備によって大きなコストダウンと同時に現場の作業を大幅に軽減し、作業効率をアップさせているそうです。

今回の研修で、北海道で起業し、全国的にも海外でも高い評価を得ている二つの企業を見学できたことは、北海道経済を学ぶうえでとても貴重な経験になったと思います。



4

## 奥田 仁 ゼミ

Hiroshi Okuda Seminar

### 地域産業の実態調査

- 研修地:余市町 ■参加学生18名
- 研修期間:06年9月13日~14日
- 地域経済学科教授:奥田 仁



今年も昨年に引き続き、余市町で地域研修を行った。5月に行った日帰りでのプレ調査に引き続き、地域調査初体験の2年生総勢18人が、6人ずつ、農業、水産加工業、商業の3班に分かれ、それぞれ調査票を持って聞き取り調査を行った。特に商業班は3人ずつ二組に分かれ学生だけで商店を一軒ずつ訪問し、かなり濃密な話をお伺いすることができたと思われる。これらを、一定の問題意識に基づいてとりまとめるという、地域調査の初歩的経験をすることができたといえよう。



## 学生報告



地域経済学科2年 高木 洋  
(札幌白石高校出身)



### 地域研修～余市～

9月の13、14日、僕ら奥田ゼミは北海道北西部、積丹半島の基部に位置し、海岸部に拓かれた町、余市町へ行ってきました。そしてこの二日間にわたり余市町の農業や町並みを目で見、肌で感じてきました。余市町の農業の特徴としては、イエスクリーンに認定されている農家が多いということです。このイエスクリーンというのは、北の農産物表示制度です。より農薬を減らし、土壌診断を行い、その土地にあった適切な肥料を使うのがイエスクリーン農家です。僕らが訪問した農家は3軒ともイエスクリーンの認定農家で、色々な話を聞かせていただきました。余市町はりんごで有名な町ですが、昔に比べ生産数が減ってきているとのこと。昭和40年くらいまではりんごで儲かっていたらしいのですが、そのあとの台風の被害などで衰退していったそうです。それでも現在は、りんごの種類を増やすなどしてりんごの活性化に努めているとのこと。余市町の土地は平らではないため果実作りに適しているようで、りんごの他にもさくらんぼ、ぶどう、ブルーベリー等も栽培しています。さくらんぼは食べる人が多いため、収穫できればお金になるそうですが、果実は収入が多いときもあるが、支出も大きいそうです。問題点としては遊休農地が増えてきているため、そこから害虫が増え、他の果実に影響を及ぼすということです。やはりりんごの生産性は減ってきていますが、ある程度は作っていかなければいけないそうです。農業生産性として、ぶどう、りんご、桜桃、なし、ブルーベリーなどが主として栽培され、道内最大級の果樹産地を形成しているそうですが、やはり労働力不足や果実価格の低迷により、りんご栽培をはじめとして大きな経営転換を余儀なくされています。そのため耕地面積の減少がみられ、今後は果実の産地として消費者ニーズの高い高品質作物の安定生産や、省力栽培、価格の安定した果樹などの導入を促進するなど、果実産地としての活性化を図ることが地域の最大の課題となっているそうです。余市は産業を生かした新しい技術開発が求められていると思います。やはり、海や山の幸が豊富ですから、それらに付加価値を付けて財を蓄えることも必要だと思いました。



地域経済学科2年 高橋 知子  
(石狩南高校出身)



### 地域研修～余市～

私たち奥田ゼミは今回の地域研修を余市町で行いました。ゼミメンバーを水産加工業・農業・商業の3つのグループに分け、それぞれが水産加工場、農園、商店街の現状の調査、また観光地で有名なニッカウキスキーやよいち水産博物館、旧下ヨイチ運上家、旧余市福原漁場を訪れ、余市町が以前、ニシン漁が盛んであった歴史などを知ることができました。

私が調査した商店街は道路の拡幅、アーケードの取り外し、改装で比較的新しい店舗が多い大川町商店街でした。調査項目としては「年商の動向、商店街の変遷、今後商店街をどうしたらよいか」などがありましたが、これに対する商店の答えは似たようなものでした。

商店街は以前と比べ人通りや店舗数が減り、商売がしづらくなったそうです。また大型店舗・コンビニエンスストアの進出により、さらに商店街を利用する人が減ったそうです。その他にも高齢化や後継者がいないことも大きな問題の1つです。

これらの問題を商店街の方々と共に解決しようとしているのが余市町商工会議所です。しかし、商店街からは「事務的なものだけでなく個人にも指導するような商店との密着感がもっと欲しい」などの意見も聞かれました。商店街を活性化させるには様々な工夫が必要だと思います。そのためには商店街の方々と余市町商工会議所の連結を強くし、意見の交換をすることが大切であると感じました。



5

## 川村 雅則 ゼミ

Masanori Kawamura Seminar

夕張地域住民との交流と、  
学生の成長

- 研修地：夕張市 ■参加学生12名
- 研修期間：06年8月31日～9月2日
- 経済学科講師：川村 雅則

今年で3年目の夕張入りである。財政再建団体入りの表明という事情もあったので、今年は、例年以上に、チカラの入った研修になった。この間のマスコミによる報道もそうだが、ともすると、夕張の問題は、会計の不正な操作、大規模な観光開発による破たんという枠組みでとらえてしまいがちである。だが、現地入りして、そこに住み続けてきたひとびとをはじめとする多くの方々と交流する中で、学生は、夕張の抱える問題を多角的・歴史的に見る目を養ったのではないかと思う。



夕張市

## 学生報告



地域経済学科2年 前多 賢大  
(帯広北高校出身)

## 地域研修で学んだこと

みなさんをご存知だと思いますが、夕張メロンや石炭の村で有名な夕張市は今年財政再建団体入りを発表しました。炭鉱産業が最も盛んだった頃は10万人以上の人口を抱えた都市でした。しかし、炭鉱産業の衰退などによる人口流出により、過疎化、高齢化が進み、今は10分の1の約1万人のマチになりました。僕たちは夕張市を訪れて、夕張市の現在の財政状況や若者の進学・就職状況、商店街の状況を調べました。この研修で一番印象に残ったことは、市役所での職員労働組合によるお話です。夕張市はなぜ再建団体入りを表明しなければならなかったのか、また、現在ある膨大な赤字をどのようにして減らしていくのか、夕張市の状況を詳しくわかりやすく話していただき、ゼミ生全員真剣に聞いていました。また、一番苦労したのは商店街の聞き取り調査でした。先生はノータッチで学生だけの聞き取り調査だったこともあり、緊張と不安もありましたが、自分の聞きたかったこと、商店街店主さんの思いを聞くことができ、大変貴重な体験になりました。事前に新聞やテレビ報道で勉強したつもりでしたが、実際現地で調査をすることによって更に詳しく、身をもって学べました。これが「地域研修」のすばらしいところだなと感じました。これからのゼミ活動や大学生活に生かしていきたいと思います。今回の地域研修でゼミの団結力もさらにUPしたので来年の地域研修はさらに良いものにします。



地域経済学科2年 三浦 将行  
(釧路江南高校出身)

## 夕張を訪れて

私たちが訪れた夕張は、メロンや石炭の歴史村などが有名ですが、財政再建団体入りを表明したことで、違った意味でも注目を集めています。ニュースや新聞などで色々見聞きしていましたが、実際のマチの状況はどうなっているのか、夕張を訪問して、多くの方々からお話をお伺いしました。

夕張に到着してまず感じたことは、昼間だというのにシャッターが閉まっている店が多く見られることで、人口の流出が進む地域の深刻さを感じました。夕張高校では、卒業生の進路状況や学校側の支援体制などのお話を伺いました。親の経済力が弱いために進路の変更をするケースが見られること、さらに就職先については、札幌など市外に就職する場合、高卒採用は給料が少ないため就職先が限られることをお聞きました。

二日目は、商店街・商店を訪問し、店主さんにお話を伺いました。一番印象深かったのは、日曜日は売り上げが少ないので本当は休みたいが、観光地を目指しているので年中無休でやっているというお話でした。財政再建団体入りをあまり悲観的に考えず、夕張が好きだからがんばってマチに活気を取り戻そうと、地元の人たちは頑張っているんだと強く感じました。最後に市役所で職員労働組合の方からお話を聞いた際には、ことの深刻さ、これから大変さがひしひしと伝わってきて、気安く「頑張って下さい」などとは言えませんでした。

今回の夕張での研修は、夕張の現状を知ることができただけでなく、普段できない体験ができ、自分の中で非常に貴重な財産になりました。お世話になった皆さん、本当に有難うございました。



6

## 北倉 公彦ゼミ

Kimihiko Kitakura Seminar

## グリーンツーリズム・part3

- 研修地:長沼町 ■参加学生31名
- 研修期間:06年9月19日~20日
- 地域経済学科教授:北倉 公彦



今年も様々なグリーンツーリズムの取組みを積極的に展開している長沼町で、I・II 合同で地域研修を行った。今回は、農家宿泊による農業体験をする修学旅行生が大幅に増加し、特区指定による「どぶろく」づくりなど、昨年より活発化していること、それが町全体に活気を与えていることを確認することができた。また、麻田信二前副知事が長沼に移り住み、ブルーベリーなどの小果樹栽培をするという、新たな生き方の実践を学ぶことができた。

## 学生報告



地域経済学科2年前谷 雅俊  
(静内高校出身)

## 多彩な長沼の取組み

長沼が今、力を入れているグリーンツーリズムに関連する様々な取組みは、長沼町全体を元気にしています。それとともに、長沼町民以外の人々に農業に関心をもってもらうなど大きな効果をあげていると思います。

例えば、「地産地消」や「スローフード運動」は、食の安全・安心への関心を高めることができます。また、消費者は生産者に自分の意見を伝え、生産者はそれに応えて消費者に喜んでもらえる農産物を作ることによって、消費者と生産者の信頼関係をつくることができます。

道外から修学旅行生を受け入れ、農家に民宿して農業体験をしてもらうことは、農業に無縁な都会の子供達に農業に関心をもたせることになり、長期的には後継者問題の解決にも役立ちます。

長沼町外の人々に食料や農業に対する認識を深めてもらうことも重要ですが、自分達の町を守っていくため、長沼の子供達に今まで以上に農業に関心をもってもらう取組みや、農業経営を行いやすい環境づくりが今後の課題ではないでしょうか。

元気な長沼の実態を見聞きし、将来に役立つことをたくさん学ぶことができましたが、それを可能にしてくれた長沼の皆さんに感謝したいです。今度は、長沼でグリーンツーリズムを体験したいと思います。



麻田さんの農場でブルーベリーを食べながら



パークゴルフ体験



大学での講義より真剣な受講態度

地域経済学科2年 佐々木 勇輔  
(岩内高校出身)



## 麻田さんの講演を聞いて

前副知事の麻田信二さんから「農村に移り住む」というテーマで、我々をとりまく環境の変化、これからの生活や地域づくりについてお話を聞かせていただきました。

戦後の日本は、環境問題や食料問題より経済に力を注ぎ、経済大国になることができました。しかし、今やアメリカのグローバルリズムに押され、日本はアメリカの属国となり、高い食料を買わされています。日本は食料自給率を上げなければならないと麻田さんは話してくれました。

地球はアメリカ一国ではありません。一国ごとが世界をつくり、一地域ごとが国をつくり、一人ひとりが地域をつくる。将来をどう考え、どう生きていくのかについて、一人ひとりが考えていくことが大切であると話されていましたが、麻田さんもそのような考え方のもとに農業に取り組んだのだと思います。

役場の方からは、長沼が取り組んでいる「グリーンツーリズム」について講義をしていただきましたが、このような町だからこそ、麻田さんは長沼を選んで移り住んだのだと思います。

夕食は、長沼役場の皆さんとジンギスカンを食べ、いろいろな話を聞くことができ、有意義な地域研修になったと思います。



講演していただいた麻田信二さん





## オーストラリア人観光客急増による ニセコ・ペンション街への影響調査

倶知安町

- 研修地: 倶知安町ヒラフ地区
- 参加学生26名
- 研修期間: 06年8月30日~9月1日
- 地域経済学科教授: 小田 清

昨年と同様、ゼミⅠ・Ⅱと合同で倶知安町において実施した。今回の研修は「近年のオーストラリア人観光客の急増によるニセコ・ヒラフ地区ペンション街に与える影響について」をテーマに、3グループに分かれてペンション・オーナーの聞き取り調査を実施した。その結果、高層コンドミニアム建設による景観破壊やコンドミニアムによる冬季間の除排雪問題、ゴミ出しの日の不徹底など、これまでにない深刻な問題の所在が明らかになった。その意味では、学生諸君にとっては初めてのペンション調査にもかかわらず、問題の所在を的確に指摘・把握しており、大変良い地域研修であったと思います。

## 学 生 報 告



地域経済学科2年 佐々木 弥基  
(札幌清田高校出身)

### 倶知安町ペンション・オーナー調査から感じたこと

倶知安町へ2泊3日の日程で出かけ、地域研修を行ってきました。初めての研修で、皆緊張気味でした。最初に役場企画振興課の方々のお話を聞き、街づくりやニセコ・ヒラフ地区の概況と景観協定について学びました。近年、オーストラリア人観光客の急増によって、ニセコ・ヒラフ地区のペンション街は幾つかの問題を抱えているようです。それに関連して、3グループに分かれペンションオーナーへの聞き取り調査を行い、以下のような事情が分かってきました。

現在、ニセコ・ヒラフ地区ではオーストラリア人によるコンドミニアム(集合的貸別荘)の建設ラッシュで、地価の高騰によるコンドミニアムの高層化と景観破壊が問題となっています。これを防止するために町では景観協定(15m以下で制限)を定め、高層化を防いでいます。しかし、法的拘束力がないため効果は薄いようです。また、冬期間の除排雪を考えないで建坪率いっぱいコンドミニアムを建設する、日本人客が減少するなど、様々な課題が存在しているようです。

しかし、夏場のラフティングやテニスなど地域の特徴を生かしたスポーツがあり、実際のラフティング体験は非常に楽しかったです。今後も、このような様々な体験を生かし、あらゆる視点から倶知安地域の動向を観察していきたいと思いました。



地域経済学科3年 片岡 健  
(紋別北高校出身)



### 外国人観光客の急増に伴っての諸問題について

私たちは昨年に引き続き倶知安町を訪れ、地域研修を実施しました。今年は、近年のオーストラリア人観光客の急増によるニセコ・ヒラフ地区のペンション街に与える影響について調査することをテーマとし、ペンション・オーナーへの聞き取り調査を行いました。そもそもオーストラリア人観光客が急増した理由として、オーストラリアよりも雪質が良い(パウダースノーが楽しめる)こと、時差がほとんどなく手軽なこと、テロなどの危険性が欧州に比べ低いことなどが挙げられ、これが口コミでオーストラリアに広まり、ニセコの人気上昇へと繋がっていきました。これにより同地区のペンションは、冬の間は常に予約でいっぱいとなる日が続き、冬の間だけで、以前の一年分の売り上げに達するところもあり、町内の飲食店、スーパー、コンビニの売り上げもアップし地域経済の発展に一役買っている状況となっています。

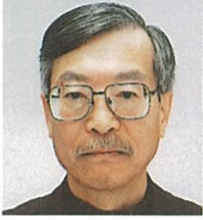


また、ヒラフ地区は外資系企業による分譲型マンション(コンドミニアム)の建物が相次いでいるため、地元住民が中心となって「景観協定」をつくり、建設の高さや、建ぺい率などに基準を設け、観光地の景観維持に努めています。今はコンドミニアムブームに沸いていますが、「このブームに終わりが来たとき、どうになってしまうのか?」という問題や除排雪の問題が残されています。今回の研修では、豪州景気に沸いているヒラフ地区の現状が良く判り、これら諸課題への対策が急務であると感じました。また、ペンション・オーナーの方々の実体験に基づきリアルなお話を聞くことができ、デスクワークからは学べない体験ができ、とても有意義な研修となりました。



## 高原 一隆 ゼミ

Kazutaka Takahara Seminar



### 地域経済の内発的発展と 地域内経済循環

- 研修地:ニセコ町 ■参加学生14名
- 研修期間:06年8月29日~31日
- 地域経済学科教授:高原 一隆

研修地のニセコ町は、目指したい地域づくりの1つのタイプとして全国的に注目されている地域であるが、基盤になるのは農業とリゾート系の産業である。ニセコ町が本当に経済的基盤を含めた地域づくりを更に進めていくためには、これら産業の産業連関によって相乗効果を生み出すことが求められている。地域研修2は、農業とリゾート産業との連携した取引を通じて、地域内経済循環強めていく可能性を少しでも把握するためのフィールドワークをすることを目的とした。

町役場を始めて、ニセコ町商工会、JA羊蹄ニセコ支所、ホテル(3)でのヒアリング、夏のスキー場の様子、ペンション村等の視察を行った。それぞれの団体のヒアリングを通して、地域内経済循環がなかなか円滑に進まない条件及びそうした条件を改善していく課題が少し明らかになり、そうした意味で、実りある地域研修となった。

## 学生報告



地域経済学科2年 細川 弘生  
(岩見沢西高校出身)

### ニセコ町の町づくり

ニセコ町には、情報共有・住民参加という町づくりの2大原則があり、情報共有の一環としてインターネット上から情報を検索できるファイリングシステムの導入、予算説明書・広報ニセコの全戸配布などが行われています。もう一つの原則である住民参加の取り組みとしては、町づくり委員会・住民提案型予算制度・子ども議会などが行われていて、大人だけでなく子どもも町づくりに参加しています。こうした様々な取り組みを通して住民と接触し、未来の担い手となる子どもたちにも積極的に町づくりに参加してもらうことで、住民全体が自分たちの町を理解できるようになっています。私たちが調査した宿泊施設では、農産物を直接農家から調達し、地産地消を試みているところもありましたが、量が量だけに安定供給は難しいようでした。ニセコ町を訪れる観光客は、雪が目的の外国人スキー客が多く、平均して6泊程していきます。ニセコ町は冬に強みはあるものの、夏には特別といえるようなものではなく、夏場をどう盛り上げていこうかが問題だとされ、今後具体的にどのような対策を執っていくのかについては、語られなかった。また、海外資本に対する不安があるといっていたが、それにどう対応していくかは語られず疑問に思うことがありました。ただ指をくわえて見ているだけでは、衰退していくのは火を見るよりも明らかなので、今後の活動に注目したいと思います。



地域経済学科3年 大西 崇之  
(北海道函館西高校出身)



### ニセコ町地域研修報告

私たち高原ゼミは「内発的発展論」を学習のテーマにしています。内発的発展論とは、その地域が持つ特性(産業・自然・文化など)を活かし、地域住民が自ら考え、そして行動し、地域の発展につなげていくという理論です。発展につなげるためには住民参加型のまちづくりや、各団体間の連携、地産地消に代表される地域内経済循環などの取り組みが必要です。

研修地のニセコ町は地域づくりのモデルとして全国から注目されています。実際に「内発的発展」の取り組みが、どこまでなされているのかを把握し、課題があれば明らかにして改善への道を探る事を目的に研修に行ってきました。

ヒアリングは町役場やニセコ町商工会、JAようていニセコ支所、3軒のホテルで行いました。町役場では、職員の方から観光協会の株式会社化や「情報共有・住民参加」を二大テーマにした先進的なまちづくりや課題を聞き、商工会では異業種間交流の難しさを、JAようていでは農家とJAの連携不足という深刻なお話を聞きました。3軒のホテルでは、農産物の現地調達の可能性などの質問をし、「地産地消」の難しさを知る事ができました。他にも道の駅「ビュープラザ」やペンション村、夏場のスキー場、リゾート計画が進む比羅夫地区などを視察し、ニセコの現状を実際に確認しました。

今後の課題は町民の積極的な町政参加、各団体間のネットワークの構築、地産地消のような地域内経済循環をもっと強める事があげられます。これらが結びついて内発的発展がなされるのだと思います。今回の研修はまちづくりの現場を肌で感じる事ができ、大変有意義な研修でした。





## 竹田 正直ゼミ

Masanao Takeda Seminar

合併後の新しい石狩市の  
社会経済と環境問題

- 研修地:石狩市 ■参加学生12名
- 研修期間:06年8月4日~8月5日
- 地域経済学科教授:竹田 正直

今年の地域研修は、総勢14名で2006年8月4・5日、合併後の新しい石狩市の「番屋の湯」研修室に宿泊して行いましたが、ゼミの学生諸君から、私自身多くの感動と誇りを得ることができました。第1に、海水浴場のゴミ拾いボランティアでの積極性と子どもたちへの暖かいおもいやり、第2に、田岡石狩市長講演への事前学習に基づく学生の活発な質疑討論の力量、第3に、歴史、治水、リサイクル、環境保護への学生の高い意識の形成でした。

石狩市



## 学生報告



地域経済学科2年 澤田 貴裕  
(旭川凌雲高校出身)

## 地域研修を終えて新たな発見が!

1日目は宿泊先の「石狩温泉番屋の湯」に到着後、石狩浜海水浴場でゴミ拾いボランティアを行い、田岡克介石狩市長の講演を聞きました。石狩市・厚田村・浜益村の合併後についてのお話で、新しい石狩市が発足して、今後全国的に「石狩市」を知ってもらうためには浜益村・厚田村の従来の地域の特性を活かすことと、新たに開発された石狩湾新港を、将来、国際貿易の拠点港として発展させていく事が重要だとおっしゃっていました。

2日目は、まず、「いしかり砂丘の風資料館」に行き、石狩市にある遺跡から発掘された化石や昔使われていた道具などの展示物を見学しました。また、パソコンや図鑑などで石狩の情報を調べることができ、石狩について新たな発見ができました。

その後、「川の博物館」に行って川の歴史や不思議、治水事業などに関する映像やパネルにより石狩川の歩み・川と産業や環境の関わりについて学ぶことができました。最後に(株)マテック石狩工場に行きました。ここでは自動車解体の工程・自動車部品の保管庫・解体された自動車の破砕処理などを見ることができました。自動車解体ラインがスピーディーに流れるために使う反転機や部品を保管する倉庫は、コンピューターシステムによりスピーディーに入出庫することができるなど、現代の情報・機械システムのすばらしさに驚かされました。今回の地域研修では、活発な質疑を行い意欲的に学習できたことやみんなと親睦を深めることができ、とても有意義な時間を過ごす事ができました。



地域経済学科2年 松浦 智志  
(帯広三条高校出身)



## 自分を見つめ直す機会に

私たち2年と3年のゼミ生は、8月4日、5日に地域研修で石狩市を訪れました。目的地の「石狩温泉番屋の湯」に到着し、荷物を置いて「石狩あそびーち」で海水浴ではなく、ゴミ拾いのボランティアを行いました。最初は、水着ではなく私服に身を纏い、ゴミ拾いをしている自分たちが場違いのように感じていたのに、気がつけば正しいこと(ゴミ拾い)に燃えている自分たちがいました。その後、宿で田岡石狩市長の講演;昨年の石狩市・厚田村・浜益村の合併後について、を聞きました。パワーポイントを用いて「厚田層」、「黄金山」などの厚田と浜益の魅力を色々と見せてくれました。来年はシンポジウムが開かれ、厚田・浜益の魅力の学問的・生科学的な位置づけや、21世紀における地域発展の絶対要素などが話し合われる



そうです。その後の夕食会と交流会は、竹田先生自作の面白いゲームなどで盛り上がり、とても楽しい時を過ごすことができました。3年生のゼミ生とも、とても仲良くなり、このゼミの仲の良さが本当に実感できる時間でした。翌日は、「いしかり砂丘の風資料館」・「川の博物館」・リサイクルを行っている株式会社「MATEC」を訪問しました。普段、絶対行かない様な所で色々な事を学びました。

たった2日間という短い期間でしたが、まだまだ書ききれないほどのとても充実した時間を過ごすことができ、これからの自分を見つめ直すとても良い機会になりました。



10

## 西村 宣彦ゼミ

Nobuhiko Nishimura Seminar

サケ定置網漁の体験及び  
サケ加工場の見学

- 研修地: 苫小牧市、石狩市
- 参加学生10名
- 研修期間: 06年9月21日、10月3日
- 地域経済学科教授: 西村 宣彦

今年は、古林ゼミと合同で実施した。テーマは「サケ定置網漁の体験実習」。サケは北海道漁業の中核品目の一つで、近年は「ブランド化」「アジア市場への輸出拡大」「廃棄部位等の機能性を生かした製品開発」といった動きが注目される。漁に参加できなかった学生は後日、佐藤水産(株)のサケ加工場を見学した。故郷の海に戻ってきたサケが、誰の手を、どのような作業工程を経て私たちの食卓に届くのか、肌身で感じ取ることができたのではないだろうか。

石狩市

苫小牧市



## 学生報告



地域経済学科2年 見子 太郎  
(帯広大谷高校出身)

## どんと来い、爆釣現象

ウイトに富んだ会話、紳士的な振る舞い、そしてヒゲ、この走、攻、守、三拍子そろった西村先生と共に私達は今回、苫小牧港にサケ定置網漁業の体験実習を行いました。簡単に説明すると、漁船に乗りサケを丸ごとまるっと捕獲することです。出港しポイントに到着すると漁師達は網をひきあげ、私達も網のひきあげの手伝いをさせてもらうことができました。そして、ここで1つの西村伝説が誕生しました。漁船に乗船したある学生がサケの威圧感や海の魔物にとりつかれて急変し、一時的におかしくなってしまったのです。私達とはまどい誰もが死を覚悟しましたが、次の瞬間1つの声が苫小牧の海にこだましました。「すべてのホラー現象は、ほらに過ぎない…Don't be afraid!」。声の主はなんと我らが西村先生だったのです。そして力強く「なぜベストを尽くさないんだ?」と言いました。西村先生の熱弁により状況は一変しました。もし、この生徒を放っておいたら、乗組員全員がおかしくなってしまう、漁船が沈没し海猿にお世話になっていたことでしょう。この出来事によりゼミ生徒はもちろんのこと、先生の熱弁によって乗組員全員の心は1つになりました。残念ながらサケはあまり網にはかかっていませんでしたが、私達の心は西村先生の網にしっかりかかってしまいました。その後、おいしいくら井やちゃんちゃん焼きをたらふく食べさせてもらい色んな意味で大変おいしい地域研修でした。最後に一言ありますが、人間にもなれず山犬にもなりきれん。お前にサケが救えるか?



地域経済学科2年 村上 慎吾  
(士別高校出身)



## 網にかかった魚は逃すな!

私たち西村ゼミは、苫小牧の経済を影で支える漁業を肌で感じるべく、苫小牧市でサケの定置網漁業の体験実習を行いました。この実習は夜9時に札幌を出発して、朝7時に苫小牧から帰ってくるという地域研修史上、まれにみる強行日程でした。学生のほとんどは、この過酷な日程に涙したでしょう…。



当日は、北海道を台風が通過した後ということもあり、私たちは、大漁を期待し、万全な状態で望みました。乗船は3人一組で夜の海へと出港して行きました。漁が始まるとその光景は凄まじく、網に引っかかった魚をあざ笑うかのごとく、次から次へと、船へと投げ入れていきました。そこで何も出来ない私たちは、海の男としてはまだまだ未熟だと痛感させられました。漁師の背中、小さいころ感じた親父の背中のようにとても大きく見えました。漁師はとても勇ましく勇敢な海の戦士でした。漁が終わると漁師さんたちの粋なはからいで、釣った鮭をその場で豪快に味噌で味つけし、ちゃんちゃん焼きとして食べることができました。この他にもホッキカレーや、イクラ丼など苫小牧の海の幸を舌で楽しむことができました。漁師は網にかかった魚は逃がしません。いつか私もこんな感じで嫁を捕まえたものです。(笑)

今回の実習は、ふだん味わえないような貴重な体験ができ、さらには、苫小牧の海を満足いくほど楽しみました。とても楽しい研修でした。



## 古林 英一ゼミ I

Eiichi Furubayashi Seminar



## さけ定置漁業の実習体験

- 研修地: 苫小牧市漁業協同組合
- 参加学生13名 ■研修期間: 06年9月21日~22日
- 地域経済学科教授: 古林 英一

本年の地域研修 I は、昨年と同様、苫小牧市漁業協同組合および同漁協定置漁業部会のご協力をいただき、北海道水産業の重要業種である秋さけの定置漁業の体験実習をおこなった。インターネットでは体験できない現実を体験させることを目的とした。

漁業者の方々ととれたての鮭を使った料理を振る舞っていただき、学生たちには様々な意味で貴重な体験となったと思われる。

苫小牧市

## 学生報告



地域経済学科2年 石井 元太  
(北海高校出身)

## 地域研修に参加して

9月21日、我々古林ゼミ I は苫小牧漁港へ行き、地元漁師さん達の船に乗り込み、鮭の定置網漁を体験しました。

はじめ、漁師さん達の第一印象は、声をかけづらいほど雰囲気と、テキパキした行動のため、じゃまにならないようにということだけを気にしていました。しかし、風よけをつくり、火をたいて暖をとってくれたり、船室の方から缶ジュースを持ってきてくれるなどの心遣いを受け、少しずつ自分から声をかけていけるようになりました。

漁師さん達と話をしている私が一番驚いたことは、大体何歳くらいからこの仕事をしているのかという質問に、13歳くらいからだという答えが返ってきたときでした。そして、後々思えばその後に知る漁のきつい仕事をそんなに幼いころから毎日のように続けているということにも驚きました。

漁のポイントにつくと、早速ひきあげが始まりました。網を船にある機械につなげると、学生は船の縁に立ち、網を引きます。ある程度の覚悟はしていましたが、網が指に食いこむなど、予想以上にづらい仕事だということを知ることになりました。

その後、数カ所ポイントを回りましたが、今年は例年よりも水温が高かったため水揚げ量は少なく、船に鮭が満載というには程遠い状態でした。網にはブリやエイ、タイの仲間と思われる魚などもまぎれていて、ただ見ているだけでもおもしろいと感じました。

港に帰ると、鮭を船から大きなタモでおろし、大きさやオス・メスの分別が始まりましたが、フォークリフトなどが忙しく動き回っていたので、あまり見ることはできませんでした。

最後に仕事が一段落すると、ホッキのカレーや鮭の汁などを振る舞ってもらい、おいしくいただきました。

この研修では普段経験できない貴重な体験をできたと思います。



地域経済学科2年 吉田 唯哉  
(北見緑陵高校出身)



## 地域研修に参加して

今年、古林ゼミナール I は西村ゼミと合同で、昨年と同様に苫小牧にてサケの定置網漁業を体験しました。学生のほとんどが漁は初体験で、私は船に乗るのも初めてでした。夜の11時に苫小牧現地集合という過酷なスケジュールの中、5隻の船に分かれ、船酔いの恐怖と大漁への期待を背負い極寒の海へと出航しました。

約1時間寒さと眠気と戦い、漁のポイントへ到着。仕掛けておいた網を機械で途中まで引き、あとはみんなで協力して船まで引っ張るという作業をしていました。網は思っていたより重く、引く作業はかなり体力をつかう作業でしたが、網の中にはサケの他にカニやクラゲ、他の魚も多く獲れ、それらを見ているだけでもかなり楽しい作業でした。

帰りの船の上では、漁師さん達がとれたてのサケをなれた手つきで捌き、料理をつくってくれていました。漁師さん達と色々な会話をしながら、また約1時間船に揺られ、港に着き、漁師さん達が作ってくれたイクラ丼やホッキ貝のカレーを食べました。もちろんとてもおいしく、これまでの疲れも忘れ、みんな夢中で食べていました。

今回は水温が例年より高く、「北海学園が来たからダメだ」と言われるくらい漁獲量が少なかったものの、誰も船酔いせず漁を体験でき、とても素晴らしい一日となりました。

今回、こうした貴重な体験ができたのも、苫小牧漁業協同組合の方々の協力のおかげであり、本当に感謝しています。





## 古林 英一ゼミⅡ

Eiichi Furubayashi Seminar

### 競走馬生産・流通施設の見学

- 研修地：日高軽種馬農協、日本軽種馬協会北海道市場、ビッグレッドファーム、他
- 参加学生9名 ■研修期間：06年9月5日～6日（補足研修 9月18日）
- 地域経済学科教授：古林 英一

日高町

軽種馬生産は北海道の主要産業のひとつであるが、競馬を支える生産・流通の現場を見学することによって、競走馬産業の全体を知ることが目的とした。関係諸施設の担当者や関係者から直接話を聞くことで、わが国の競走馬産業の現状と問題点を多少なりとも理解することができたとと思われる。

## 学生報告



地域経済学科3年 濱野 晋輔  
(千歳高校出身)

### 競走馬が活躍するまでの課程

私は、地域研修で静内にある馬の市場などを見学させていただきました。私は馬について以前は全く知らなく、興味もなく、競走馬で最近話題を独占している有名なディーブインバウト、コスモバルクなどといった有名馬くらいしか知りませんでした。

今回、私がこの研修を通じて知りたかったこと、それは題名にもあげた「競走馬が活躍するまでの課程」。一頭に注目し、競走馬が市場で売られ、調教を通じて、レースに出走するまでの流れを是非この目で見てみたかったのですが、あまりにも研修期間が短いため、それはできませんでした。しかし、私の目で実際の競り(セリ)をおこなっているところを見ることができ、また、後日札幌競馬場で実際のレースを見たことにより、競走馬がどのような課程を経てレースに出場するのかという事を見ることができたので、貴重な体験をしたと思っています。



地域経済学科3年 高橋 大輔  
(大麻高校出身)



### 地域研修に参加して

僕たち古林ゼミⅡは今回の研修で、サラブレッドが生まれてからレースに出走するまでを見てきました。

まず初めに門別競馬場にいき競馬場の中を見学してきました。そこで、サラブレッドがレースに前に乗る体重計にみんなで乗りました。サラブレッドの体重は人間7、8人くらいです。

次に北海道市場を見学しに行きました。ここは馬が売り買いされるところで、すごく立派な建物で水がすごくおいしかったです。

その次は種牡馬の見学に行きました。そこではフォーティナイナーやオペラハウスといった名種牡馬を見てきました。彼らは一回の種牡料が数百万円で僕たちが一生かかっても稼ぎきれないくらい稼いでいます。そのせいか僕たちを見下ろしているかのようにお尻を向けてきたり、写真撮りたいのに変なほう向いたり、暴れたりいろいろな嫌がらせをされました。

二日目は、ビッグレッドファームに行きました。そこでは、あの有名なコスモバルクが僕たちを待っていてくれました。そしてコスモバルクに草をあげようと思いましたが、馬に耳をかじられた人の話を思い出して結局あげることは出来ませんでした。その後コスモバルクの調教の様子を見学して、おそばを食べて帰ってきました。今回の研修で一番印象に残ったのはサラブレッドたちの目がとてもかわいかったことです。またぜひいきたいと思っています。



13

## 水野 邦彦 ゼミ

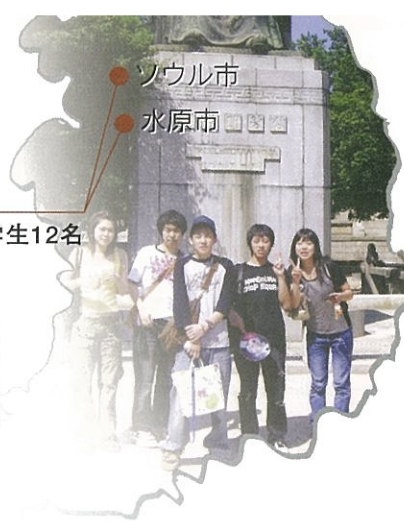
Kunihiko Mizuno Seminar



## 韓国社会を知る実地研修

- 研修地：韓国 ソウル市・水原市
- 参加学生12名
- 研修期間：06年8月30日～9月4日
- 地域経済学科教授：水野 邦彦

わがゼミの地域研修Ⅰ・Ⅱは、8月30日から9月4日まで韓国ソウル市および水原市にておこなわれた。今年度は学生がいくらか自由に行動できるように計画を立てた。韓国研修が二度目の学生はあるていど韓国の雰囲気に慣れて余裕をもって行動できたようであるし、はじめて韓国研修に参加した学生は見るものすべてが新鮮なようであった。今回もしばしば韓国の若者につきあってもらい、わがゼミの学生たちはこの人々と交流を深めたようである。



## 学生報告

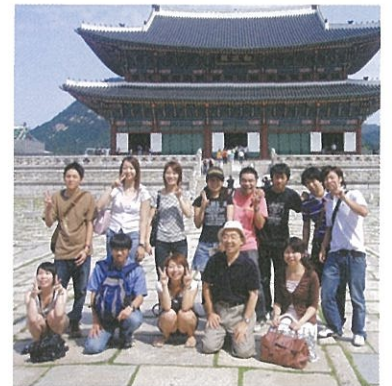


地域経済学科2年 森 夏樹  
(札幌啓成高校出身)

## やさしかった元「慰安婦」のおばあさん

研修でいちばん勉強になったのはナナムの家に行ったことです。ナナムの家はソウルから2～3時間の、周りになにもない静かな場所にありました。到着したとき、ここで元日本軍「慰安婦」が生活しているのかと思うと妙な恐怖心が起こり、なにも見ずに帰ってしまいたいと思えました。まず敷地内にある歴史館を見学したのですが、そこに展示されていた当時の写真では「慰安婦」たちがみな無表情だったり悲しそうな顔をして写っているのに、唯一笑っている順番待ちの日本軍兵士の姿がとても腹立たしく思えました。慰安所を再現した部屋も衝撃的で、入り口には名札がかかっているその横に料金表が貼ってありました。中に入るのが嫌でしたが、おそるおそる入ってみると、薄暗く、長椅子に布がかかっただけの堅い木のベッドと洗面器がただ置いてあり、まさに地獄の空間で、言葉ではあらわせない恐怖がありました。

このあと思いがけず当事者のハルモニ（おばあさん）にお会いできることになり、どんなふうに会えばいいのかと不安でしたが、お会いした3人のハルモニは笑顔でソファの隣にすわらせてくれました。日本人に対する怒りや憎しみがあるはずなのに、それを出さずやさしく迎えてくれ、帰りにはいっしょに写真を撮り握手をしてくれて、本当にうれしかったです。このことは一生忘れられません。



ソウルの代表的な王宮・景福宮



市場にて韓国の友人と



安重根の像のまえで



国宝第1号の南大門を背景に

地域経済学科3年 渡邊 裕也  
(北海高校出身)



## 短く感じられた韓国滞在

昨年につづいての韓国研修だったため、いくぶん気持ちに余裕をもって、また韓国語の理解度もいくぶん高めて、韓国に滞在することができました。昨年知り合った韓国人の仲間が今年も親切にしてくれたこともうれしかったです。見学地としてはまず、昨年は中途半端にしかみられなかった景福宮をゆっくり散策しながら見学しました。敷地内には国立民俗博物館もあり、韓民族生活史、生業・工芸・衣食住、韓国人の一生という3つの展示エリアを、同行の韓国人の実生活にもとづく説明も聞きつつ、みてまわりました。つぎに訪れた西大門刑務所歴史館は、かつて独立運動に加担した韓国人を逮捕し監禁する監獄でした。一度ここに入られると生きて出てくることはできないといわれるほど残酷な拷問と処刑がくりかえされた場所です。日本植民地時代に韓国人の独立運動があり、それが弾圧されたことは知っていたつもりでしたが、いざ拷問の様子や脱獄防止の堀・望楼を目の当たりにすると、心が痛み悲しい気持ちになりました。また、ソウル中心部にあるタプコル公園は、三一運動の発祥の地で、公園内には独立宣言書が朗読された八角亭や宣言文が刻印された記念碑があり、さらに当時の各地での独立運動の様子を刻んだ12枚のレリーフが建てられ、独特の存在感を醸し出していました。

滞在中は、知り合いの韓国人たちと日々交流し、いっそう親しくなるとともに、おいしい韓国料理を堪能し、とても短く感じられた5泊6日でした。



14

## 水野谷 武志ゼミ

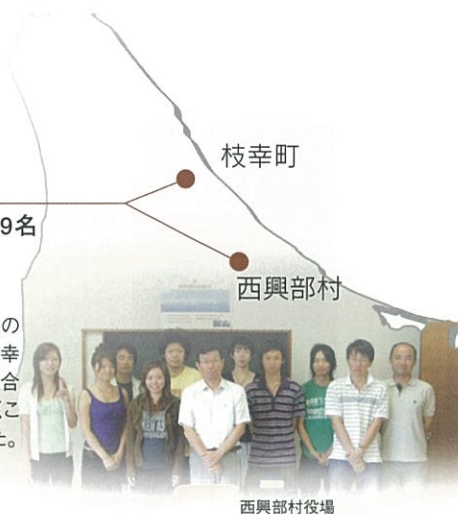
Takeshi Mizunoya Seminar



## 市町村合併

- 研修地:西興部村、枝幸町
- 参加学生9名
- 研修期間:06年8月7日~10日
- 地域経済学科助教授:水野谷 武志

水野谷ゼミナールは市町村合併問題を今年の研究テーマとしました。そこで、合併せずに自立の道を選んだ西興部村と、この村から比較的近隣で最近合併した地域の1つである枝幸町(旧枝幸町と旧歌登町の合併自治体)の行政担当者を上記日程で訪ね、聞き取り調査を通して市町村合併問題について学びました。現地を肌で感じ、行政担当者が真摯に訴えかける様々な問題を聞くことにより、市町村合併について対照的な決断を下した2つの自治体を比較検討することができました。



西興部村役場

## 学生報告



地域経済学科2年 伊藤 さやか  
(札幌旭丘高校出身)

## 合併か自立かという選択

私たち水野谷ゼミでは、北海道における市町村合併の現状の調査を行うため、非合併自治体である西興部村と合併自治体である枝幸町を訪問しました。西興部村は、平成15年に合併をせずに自立の道を選択した村であり、枝幸町は平成18年3月20日に旧枝幸町と旧歌登町が合併してできた町で、訪問した当時は合併して半年も経過していないという状況でした。

西興部村では、太田助役の講演を聞きました。講演の主な内容は合併しなかった理由であり、想像以上に厳しい現状であることを知りました。西興部村は人口が少なく、現在では北海道で2番目に人口が少ない村です。この人口の少なさが自立の道を選んだ西興部村の将来を不安にさせる原因になっているようでした。

合併をした枝幸町の調査では、枝幸町役場の深井さん、歌登総合支所(旧歌登町役場)の合田さんをそれぞれ訪ね、質疑応答を行いました。2人のお話から、お互いが対等な立場で合併の議論が行われたこと、2町の連携は合併前も合併後もうまく取れていることがわかり、枝幸町の合併は良い方向に進んでいると感じました。

合併か自立かどちらが良いとは言いきれませんが、住民一人一人が市町村合併についてよく理解し、時間をかけて考え、話し合うことが大切だと感じました。地域研修で西興部村と枝幸町を訪問し、現地の方々の生の声を聞くことで、市町村合併や地域について真剣に考える良い機会となりました。



歌登総合支所



枝幸町役場



地域経済学科4年 西澤 慶祐  
(北海道大麻高校出身)



## すぐに結果がでるわけではない

私たち水野谷ゼミは今回の地域研修で、「市町村合併」について、2006年8月7日~10日の3泊4日の行程で西興部村と枝幸町へ行ってきました。

西興部村は非合併の事例として、村の助役である太田さんの公演を拝聴し、村立の施設である3大夢シリーズの「木夢(コム)」「花夢(カム)」「IT夢(アトム)」と、ギター工場を見学させていただきました。研修中の3泊は全部西興部村に泊まり、3日目の夜には役場の職員の方々と野外でバーベキューをして、談話しながらわいわい村の状況などを聞くことができました。

枝幸町は、2006年3月に枝幸町と歌登町が合併してできた新しい町であり、枝幸町役場と旧歌登町役場でそれぞれ合併に1番貢献されたお二方に質疑応答させていただきました。私は昔この枝幸町に住んでいた時があり、あまり昔と変わってなくて懐かしく感じました。

市町村合併の是非はまだわかりません。と言うのも、すぐに結果の出るものではないからです。市町村合併を期に、するにしてもしないにしても、これまでの財政の見直しや今後の見通しを考える、という事ができたのだからマイナスな事ではないのだと思いました。市町村合併は地方交付税などで国の財政にも深く関係していて、市町村合併に関係ない都市に住んでいる人たちにも関係する事です。全ての国民にもっと関心を持って欲しいと思います。



15

## 山田 誠治ゼミ I

Seiji Yamada Seminar

## 地域メディアとは何か

- 研修地：函館市 ■参加学生14名
- 研修期間：06年9月25日～27日
- 地域経済学科教授：山田 誠治

インターネットの浸透、テレビのデジタル化など情報化社会が急速に進む中、メディアのあり方や影響力は次々と変化しています。そうした中で、では地域の情報はどのような担い手が、どのように伝えているのか、それが地域の活性化にどのような意義があるのか、それを探求するのが地域メディア研究のテーマです。この研修では、コミュニティ放送の先駆的な地域である函館を訪れ、街とどのように関わっているのかを実感してきました。



函館市

## 学生報告



地域経済学科2年 西川 宏樹  
(羽幌高校出身)



## 地域のための放送とは

私たち山田ゼミは地域メディアについての研修を目的に、函館市を訪れ、NHK函館放送局とFMいるかを見学してきました。

NHK函館放送局では、まず週一回のラジオ公開放送番組『どんと道南』に出演し、放送終了後はテレビのスタジオや放送機器を見学・体験させていただき、説明を受けました。この番組は道南地方向けに制作され、普段出演できない地域の方々にも出演してもらい紹介していくという地域参加型の番組づくりで、視聴率ではない視聴者の評価を大切にしているところに、地域メディアの意義を感じました。

FMいるかでは、局内を見学後、北海学園OBの福本さんからお話を聞くことが出来ました。FMいるかは全国で初めての地域コミュニティFM局で、地域のタウン情報やニュース放送をしているほか、FM局と市内の商店などが協力してリスナーへのサービスを行う試みも行われていました。

どちらの放送局にも共通しているのは、広い範囲の情報を伝える道内や全国放送とは違い、地域を対象を限定し、「地域のための放送」を行っているということでした。また、地域メディアと地域が連携し、工夫次第では地域経済の活性化にも寄与できる可能性も理解できました。

今回の地域研修では普段、教室ではできない、実際に見て、体験して、多くの方々からお話を聞くという、とても貴重な経験が出来ました。また、函館の観光もすることができ、観光都市としての活気ある街並みを見ることができ、とても意義のある研修でした。



地域経済学科2年 名和 泉  
(札幌龍谷学園高校出身)



## 放送の現場を見て

私たちのゼミは地域メディアについて勉強しています。今回の研修では、FMコミュニティ放送として全国で初めて開局したFMいるかのある函館市に行きました。

季節的にはもう寒い中、函館の朝市では「朝市食堂」や市場の活気に驚かされました。その後、街の主要な地域を巡り午後にはNHK函館放送局を訪れました。

NHK函館放送局では、道南で放送されている【どんと道南ラジオ】の生放送に参加し、ラジオの生放送を見るのも、アナウンサーが話している現場を見るのも私にとっては初めてで、貴重な体験となりました。放送の現場に触れ、これまであまり興味がなかったラジオ放送にも興味を持つことができました。ただ、放送局の見学者はお年寄りに偏っており、FMいるかの局の方もおしゃっていましたが、もっと若者たちも参加してくれるようになればラジオが活性化される、と聞きこれから少しでもラジオ放送にも積極的に耳を傾けよう、と思いました。

放送局の訪問を終えて見た函館山の夜景は、天気も良く、世界の三大夜景とあって宝石のように美しく、人だかりが多い中、苦労しながらバッチリ写真をとることができました。

ゼミメンバーでの初の研修ということもあって最初は不安もありましたが、最終日の打ち上げではすっかりお互いうち解け、楽しい地域研修にすることができました。

今回の地域研修で学んだことを生かし、これからのゼミ学習にも取り組んでいきたいと思います。



16

## 山田 誠治ゼミⅡ

Seiji Yamada Seminar

## コンパクトシティの魅力を探る

■研修地:金沢市 ■参加学生13名

■研修期間:06年10月25日~27日

■地域経済学科教授:山田 誠治

金沢は、その伝統を基礎にしなが、世界都市として歴史と新しさを求める街づくりを展開しています。北海道では体験できないこの異質な街を訪れ、実感することは、道内出身者である3年ゼミ生にとって貴重な経験です。中心街の賑わいと歴史を残した街並みの魅力に触れ、またそれを維持する街の努力について説明を聞き、コンパクトシティを散策することで、街の魅力とは何か、について感じることができたのではないのでしょうか。

金沢市

## 学生報告



地域経済学科3年 今井 志保  
(藤女子高校出身)

## コンパクトシティの魅力を実感

金沢という街は、武家屋敷や東茶屋街の景観など、古い建物や街並みがきれいに残されていることを実感しました。また、屋敷跡や神社などが人々の生活圏の至る所にあり、歴史の深い街であると同時に、歴史が現在に溶け込んでいる街であることが印象的でした。

そして街全体は、観光地と居住地が完全に別空間であるような大都市ではなく、むしろ観光地と居住地が一体化しています。数ある観光地のほとんどを歩いて巡ることができ、街全体が凝縮されている「コンパクトシティ」というものを体験できたと思います。

また、金沢の代表的な観光地のひとつで私が面白いと思ったのは、「21世紀美術館」です。この美術館には今まで「芸術」と呼ばれてきたような美しい絵画や彫刻は置いておらず、近代的で斬新な作品を作る「近代芸術家」の作品が多く展示されており、今まで見たことのないようなつくりです。金沢市観光交流課の方のお話にもありましたが、「新しいものをアピールするよりは古いものを売りにしていこう」という考えを持ち、歴史的なものを多く残す一方で、「21世紀美術館」という近代芸術家の作品を展示している施設があり、それを金沢の名所にしようとして取り組んでいます。そのギャップがまた金沢への観光客を増やす要因になり、「古き良き街」というだけではなく、新しいことにもチャレンジしている意欲的な街だ、という印象を受けました。



地域経済学科3年 小林 佳保里  
(富良野高校出身)



## 歴史的な街並みと生活の調和

私たち山田ゼミが訪れた金沢市は、日本の伝統的な景観がそのままの形で残されている街です。時代劇の撮影でも使えるような武家屋敷は本当にすばらしく、しかも現在でもそこで人が普通に生活しているのには驚きました。ただ、その街中の一部にはマンションが建ち、歩道もない狭い道路に自動車が入り込んでくるなど、生活の場と景観を両立する難しさも実感しました。道路事情は、北海道の方が整っているかな、と思いました。

この武家屋敷のすぐ隣には中心街の香林坊があり、商店街にはいろんな店が揃っていて、事前に想像していたよりも小さく、そして街の活気がありました。ただ、金沢でもイオンの出店が郊外で予定されており、この街への影響を考えると、ゼミで学習してきた郊外化の弊害が予想され、心配です。

市の東部にある「東茶屋街」は、京都のような古い街並みでしたが、金沢は武士の街、京都は貴族の街、という事も市の観光交流課で伺い、なるほどと思いました。

広くて細やかな兼六園が紅葉で一杯になるには少し早かったのですが、いろんな面で日本の歴史・伝統・文化を継承し、地域の特徴を生かしていると言う点で金沢は素敵な街だと思います。北海道では見る事ができないそんな街を直接見て触れることにより、文献やネットでは得られないものを体験できました。そして、ゼミ生とこれまでにない交流ができたのも、大切な収穫となりました。



## 北海学園大学経済学部

経済学科・地域経済学科

本件に関するお問い合わせは



経済学部:TEL.(011)841-1161  
(内線2222)

<http://www.hokkai-s-u.ac.jp>  
<http://www.econ.hokkai-s-u.ac.jp>



10月 旭岳